HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	東アジアにおけるクロテンの皮衣 : 特に古代日本の「ふるきのかわぎぬ」の実像をめぐって
Author(s)	大舘, 大學
Citation	『アイヌ史を問いなおす : 生態・交流・文化継承』（アジア遊学 139）蓑島栄紀編著, 勉誠出版. 2011.3 p.161-177. ISBN: 978-4-585-22605-5
Issue Date	2011-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56459
Type	bookchapter (author version)
File Information	bensei.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

東アジアにおけるクロテンの皮衣
――特に古代日本の「ふるきのかわぎぬ」の実像をめぐって

大舘大學

古代から近世にいたる東アジア諸地域におけるクロテンの皮衣あるいは毛皮を使った衣服のいくつかの例を紹介した。また、古代日本におけるクロテンの皮衣利用の研究についていくつかの問題点を指摘した。さらに、古代日本のクロテンの皮衣の形状を近隣諸地域の皮衣の例と文献記載より類推を行った。

おおだち・だいがく――（大舘智氏／智志とも表記）一九六三年まれ。北海道大学低温科学研究所・同大学院環境科学院助教。専門は生態学、哺乳動物学、動物文化誌。有職装束研究会「綺陽会」会員。共著に『日本の哺乳類学Ⅰ　小型哺乳類』（東京大学出版会、二〇〇八）、編著に『The Wild Mammals of Japan』（松香堂、二〇〇九）など。

はじめに

本稿は、古代から近世における東アジアのクロテンの皮衣、特に日本古代の皮衣についてのレビューを主目的としているので、近世アイヌ史におけるクロテンの毛皮の交易とは直接には関係しない。しかし、清や朝鮮におけるクロテンの皮衣の情報は、アイヌが北海道・樺太で採集し大陸に渡ったクロテンの毛皮がどのように利用されていたかを知るための参考となろう。また東アジアにおけるクロテンの皮衣の利用は、古代から江戸期のサンタン交易や清朝の終焉まで連綿と続くので、古代日本のクロテン利用は、近世アイヌ史と完全に無縁というわけではない。さらには古代日本におけるクロテン皮の入手ルートには渤海国経由の他に、奥州―北海道ルートも想定されており（蓑島　二〇〇五）、当時の北海道の居住民である擦文文化人やオホーツク文化人、つまりアイヌの祖先集団と思われる人びととの関連が示唆され、クロテンの毛皮の終着地である古代日本でどのように利用されていたか知ることは有意義であろう。

古代―中世初期の日本（奈良～鎌倉時代初期）、特に平安時代の貴族社会において黒貂裘（ふるきのかわぎぬ）は貴重品と

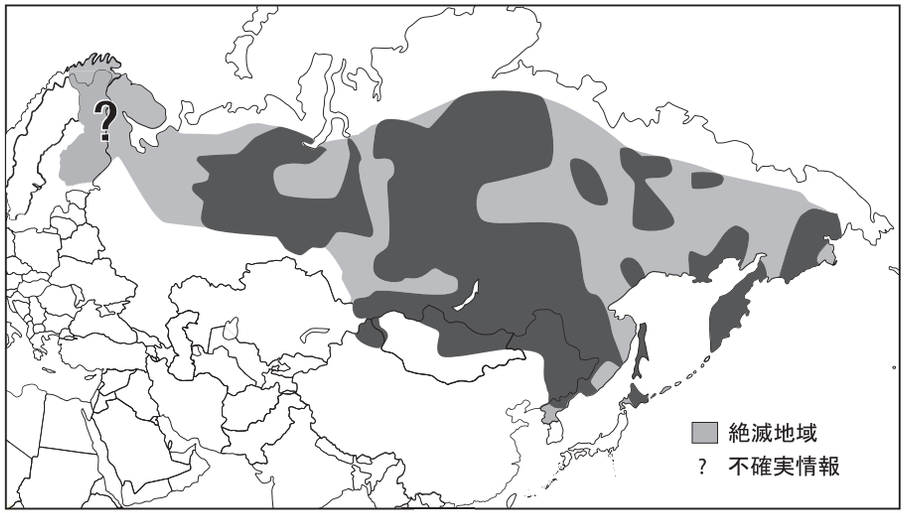

図1　クロテンの分布図　濃い部分は現在の分布。薄い部分は過去の分布。“？”は疑問がある分布域

してもてはやされた。また、『源氏物語』や『うつほ物語』などの平安時代の文学作品や貴族の日記などの文献にも、黒貂裘（黒貂之裘、ふるきのかわのおほんぞ、などとも表記）はしばしば登場する。このように古代日本ではクロテンのことを「フルキ」と呼んでいた。近年、古代東アジアのクロテンの交易に関する論考が多くなされているが、黒貂裘の形状に触れたものは少ない。これは貂裘が朽ちやすい毛皮製品であり、遺品例や当時の絵画への描写例もないことによるものであろう。しかし実像がブラックボックスなままで論議がすすんでいくことは好ましい状況とはいえない。

本稿では、まず、クロテンの生物学的情報と東アジアにおけるクロテンの毛皮の利用史を簡短に概観する。次に、古代から近世の東アジア諸地域におけるクロテンなどの皮衣の実例を紹介する。最後に古代日本におけるクロテンの皮衣研究のいくつかの問題点を再検討する。そして古代日本の皮衣の形状について、諸文献や東アジアの遺物に基づいた類推を行う。

クロテンについて

クロテン毛皮の交易史を扱ったいくつかの論考では、クロテンの生物学的情報についての誤認が散見されるので、先ずはクロテンの動物学的基本情報について簡単に説明する。

クロテン *Martes zibellina* は食肉目イタチ科テン属の哺乳類で、ユーラシア北部の森林地帯に広く分布している（**図1**）。東アジアでは、中国東北部、ロシア極東のアムール地方および沿海地方、樺太（サハリン）、北海道が主な生息地である。クロテンは、雄の成獣は一キログラム、雌は〇・七キログラム前後の中型のテン類で、木にたくみに登り、齧歯類、鳥類、昆虫類などの小動物や果実類を主な餌としている（Heptner et al. 2002, Ohdachi et al. 2010）。〝黒〟テンとはいうものの、毛色は黄褐色から暗褐色まで、かなりバリエーションがある（**図2**）。漆黒の毛皮は最高級品とされ、通常バイカル湖東部のバルグジン地方産のものに限られる（Heptner et al. 2002 (1967)）。この毛色多型はメラニン色素産生に関与するMc1r遺伝子と関係があると推定され、大陸や樺太産のクロテンは通常、暗色になる遺伝子型のみを持っているが、北海道産のものには暗色になる遺伝型の他に黄色や中間の毛色の遺伝型があることがわかっている（鈴木　二〇〇八）。また冬毛と夏毛は毛質・毛色がかなり異なる。例えば、北海道産の夏毛ではクロテンの名のごとく黒い毛色であるが、冬毛では淡い褐色になり、刺し毛が密生する（**図3**）。毛皮製品にされるのは通常、冬毛の個体である。

二〇〇九年版のＩＵＣＮ（国

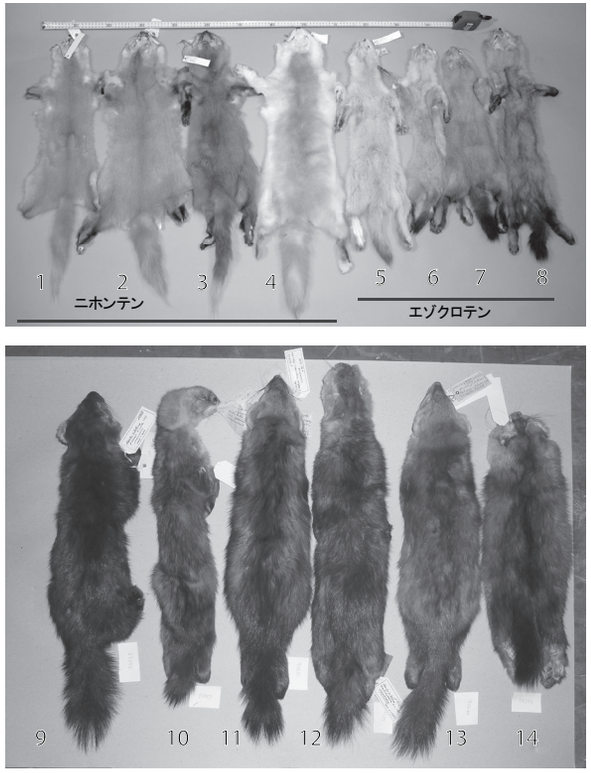

図2　クロテンおよびニホンテンの冬毛の色彩バリエーション
1-4：ニホンテン（キテン・タイプ）　5-6：北海道産クロテン（エゾクロテン）　9-14：ロシア産クロテン（9：バルグジン、10：沿海地方、11：中央シベリア・ツングースカ、12：カムチャッカ半島、13：樺太（サハリン）、14：中央シベリア・サヤン山脈）
日本産の標本は北海道大学北方生物圏フィールド科学センター所蔵
ロシア産はロシア動物学研究所所蔵（A. Abramov氏撮影）

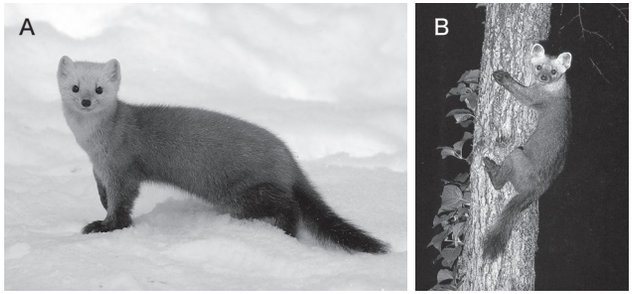

図3　北海道産クロテンの生態写真
A.冬毛（丸瀬布町）。岩井基氏撮影　B.夏毛（幌延町）。富士元寿彦氏撮影

際自然保護連合）のレッドデータランクでは、クロテンは種全体としては軽度懸念であるが、日本の環境省の二〇〇七年度版のレッドリストでは、北海道産のクロテンは準絶滅危惧種とされ、北海道南部や択捉島ではほぼ絶滅している。日本、中国、北朝鮮では保護獣であり、韓国ではすでに絶滅したと思われる。一方、ロシアでは現在も重要な経済動物であり保護区以外では狩猟獣であるが、各地で絶滅している（**図1**）。

本州以南（本州、四国、対馬、九州）にはクロテンとは別種の日本固有種のニホンテン *Martes melampus* が分布している（朝鮮半島南部にもかつては分布していたという説もある）（Ohdachi et al. 2010）。この種は近年、北海道南部や佐渡島に人為移入されている。ニホンテンは対馬に生息するツシマテンとそれ以外のホンドテンの二亜種に細分される。ホンドテンにはキテン（黄貂、木貂）とよばれる褐色の毛色タイプとススステン（煤貂）と呼ばれる黄色い毛色タイプがあり、ツシマテンはススステンに似た毛色である。いずれの毛色タイプも夏毛と冬毛で毛色パターンが大きく異なる。また、クロテンとならび東アジアで普通に見られるテン類として、キエリテン *Martes flavigula* という大型で胸の部分が黄色い襟状の毛色をしたテンがいる。この種はニホンテンのキテンと呼ばれる色彩タイプとは全くの別種であるので注意が必要である。キエリテンはテン属の中では、クロテンやニホンテンなどとは形態的、系統的に少し異なった位置にある（Heptner et al. 2002, Koepfli et al. 2008）。キエリテンはロシア沿海地方・アムール地方から朝鮮半島、中国東部をへてインドネシアに至る東アジアの東岸沿いと、中国雲南地方からヒマラヤ地方にかけて広く分布している。以上の二種も東アジアあるいは日本における貂裘の原皮として重要であったと思われる。この他に西ヨーロッパから中央アジアをへて、モンゴルや中国新疆、チベットにはムナジロテン *Martes foina* が分布しているが、東アジア東部での皮衣の原皮としてはあまり重要でなかったと思われる。

三、東アジアにおけるクロテン利用略史

クロテンの皮衣や毛皮製品は古来からユーラシア大陸では重宝とされてきた。いくつかの例を挙げよう。

中華方面ではかなり昔から北方からの交易品として珍重されていたらしい。たとえば、中国戦国時代の趙の宰相李兌が、対秦政策を策士の蘇子（蘇秦）に依頼するための資金源として、「黒貂之裘」などの財物を送ったことが記載されている（『戦国策』趙巻第六）。ちなみに、この時の趙王の父が「胡服騎射」を導入したことで有名な武霊王である。趙では従来から北方騎馬民や狩猟民と交流し、黒貂裘が輸入されていたのだろう。そして漢代以前の粛慎、三国時代の挹婁・夫余、その後の勿吉・靺鞨・女真といった北東アジアの人びとも中華王朝に朝貢品としてクロテンをもたらした。古代日本に多大な文化的影響を与えた唐（六一八～九〇七）は渤海国（六九八～九二六）や東北地方、アムール地方の民族から大量に黒貂皮（ないし貂皮）の貢納を受けている（佐々木　一九九六、菊池　二〇〇四、佐々木　二〇〇六）。古代日本でのクロテンの利用も中国の唐～宋代を中心とする北東アジアの世界情勢のコンテクストで理解すべき問題である。

日本における「貂」に関する初めての公式記録は、『続日本紀』の神亀五（七二八）年一月十七日に渤海使が朝廷に貂皮三〇〇張を貢いだ記録だと思われる。この貂の種はクロテンである可能性が高いとされる（蓑島　二〇〇五）。これ以後、古代日本、特に平安時代に、クロテンの皮衣は貴重品として扱われていく。

一方、モンゴル高原でもクロテンの毛皮は珍重され、モンゴルの創世記である『元朝秘史』にも逸話が残っている。モンゴル族のテムジン（後のチンギス・カン）は、メルキト族に拉致された妻ボルテを奪回し、メルキト族を壊滅させるために、ケレイト族の実力者トオリル・ハンの軍事的助力を得ようとクロテンの皮衣を贈呈した。トオリル・ハンはこの贈り物への返礼として、テムジンへの援助を行い、テムジンは目的を遂げる。クロテンの皮衣の返礼のために（もちろん戦利品や遊牧地確保という意図もあったろうが）、部下や自身の命をかけてまで軍勢を繰り出したのである。『元朝秘史』の史料的信憑性はさておき、少なくとも『元朝秘史』成立時のモンゴルでは、クロテンの皮衣はそのくらい価値のあるものとして認識されていたことを示している。

歴代中華王朝では、古来よりクロテンの毛皮は珍重されたものの、宮廷の服飾品としてクロテンの毛皮が重要とされるのは明代（一三六八～一六四四）以降である（河内　一九九二、

佐々木　一九九六）。女真族などの中国東北地方やアムール・沿海地方の民族は、中華王朝以外にも李氏朝鮮や遊牧民族にもクロテンの毛皮を貢納し、朝鮮や遊牧民の上流階級の間で用いられていた。そして朝鮮や遊牧民からはその貢納品をさらに明などの中華王朝へ貢納していた（河内　一九九二、菊池　二〇〇四）。朝鮮では明末あたりからクロテンの毛皮製品が普及し、主に支配階級が利用した（海保　二〇〇〇）。東北地方の女真（ジュシェン）族が大清帝国（ダイチン・グルン）を打ち立て、一六四四年に明に代わって中華王朝となると、女真（後に満洲マンジュと改称）族においても、クロテンの毛皮製品は皇帝や上流階級の服飾品となり清宮廷の必需品となった（佐々木　一九九六、西村　二〇〇三、劉　二〇〇三、下山　二〇〇五）。時代が下がると富裕な庶民階級にもクロテン製品が用いられ需要が高まり、清朝にとって、東北地方、アムール地方、沿海地方、樺太はクロテンの供給を求める重要な地域となった（佐々木　一九九六）。清によるアムール・沿海地方の辺民制度と密接に関わるのが、近世アイヌが関与したサンタン交易で、クロテンの毛皮は重要な交易品となっている。

一方、ユーラシア西部のヨーロッパではロシアを発信地として、クロテンの毛皮は服飾の一部分やコートとして利用され、王侯貴族や富裕階級にもてはやされた（西村　二〇〇三、下山　二〇〇五）。ロシア人は十六世紀後半から本格的に東進し十七世紀前半までにはオホーツク海に達した（三浦　二〇〇三、土肥　二〇〇七）。ロシア人東進の最も重要な理由はクロテンなどの毛皮の確保である（フォーシス　一九九八、西村　二〇〇三、下山　二〇〇五）。そして、クロテンの二大需要国であるロシア帝国と大清帝国は十七世紀以降国境線をめぐる攻防を始めるが、その領土争いの重要な理由の一つがクロテンの毛皮の入手地域の確保であった（西村　二〇〇三、下山　二〇〇五）。このように東アジア史を通観すると、クロテン交易と利用は、古代から近世、近代まで連綿としてつづいていることが分かる。

四、東アジアにおける皮衣

この節では、古代より近世における東アジアにおけるクロテンを中心とする皮衣の絵画や遺物を紹介する。

はじめに、東アジアにおける皮衣の古い絵画の一つである中国南北朝時代の南朝・陳の文帝（在位五五九～五六六年）の肖像画である（**図4**）。これはクロテンの毛皮ではなく白狐皮大衣（白狐裘）と呼ばれるアカギツネ *Vulpes vulpes* の腋の白い部分だけ集めて作られた皮衣で、皇帝だけに着用が許されていた。また朝鮮半島でも同様な狐の皮衣があり、国王だけが着用することができた。これは前身頃が左右に分割し胸の紐で結ぶタイプで、丈は腰から脛まで程度の長さである。北朝の皇帝や北方民族の王侯貴族も、クロテンを用いて同様な形状の皮衣を用いていたかもしれない。

唐・宋や渤海国においてクロテンの皮衣は珍重されていたが、古代日本における黒貂裘と同じく、絵画資料が乏しく形状についての詳細は不明である。しかし、原皮の交易のみならず、製品になった黒貂裘が中華王朝、渤海国、日本の間で直接贈答などに使われていたことから、その形状は、古代日本におけるタイプと同じであったと思われる。

次に、時代は下り中国明末の産業書『天工開物』の「裘」（皮衣）の記載を紹介する。そこには一着の貂裘を作るのに六十数頭の貂が必要であると書かれている。**図2**から判断すると、一頭のクロテンから背側のみの毛皮としても約一三×三センチメートルの長方形の毛皮が採れそうである。単純に六十三頭分掛けあわせると約二・五平方メートルの面積となる。二・五平方メートルの面積の毛皮を用いて現代の日本の着物に仕立てると、調度、裾を引きずる長さとなる。このことから、明末の貂裘には長いタイプのものがあったことが分かる。

明の後に中国全土を治める中華王朝となったのは清（一六四四～一九一二）である。清はツングース系の女真族（満洲族）を支配民族とした征服王朝である。従って清の服制には北方民族の影響が大きく、毛皮製品を用いた服飾品をふんだんに使っている。皇帝や上流階級の冬の礼服として「端罩（たんとう）」（duān zhào）というコートがある（百度百科 http://baike.baidu.com によれば満洲語の〝打呼〟の音写らしい）。**図5A**は毛皮を外側に向けた（翻毛皮）端罩である。皇帝はクロテンと黒い狐皮

図4　中国南北朝時代の陳の皇帝の肖像画
「陳文帝像」（閻立本）。日本語版Wikipediaより転載。上衣として着用しているのは白狐大衣である

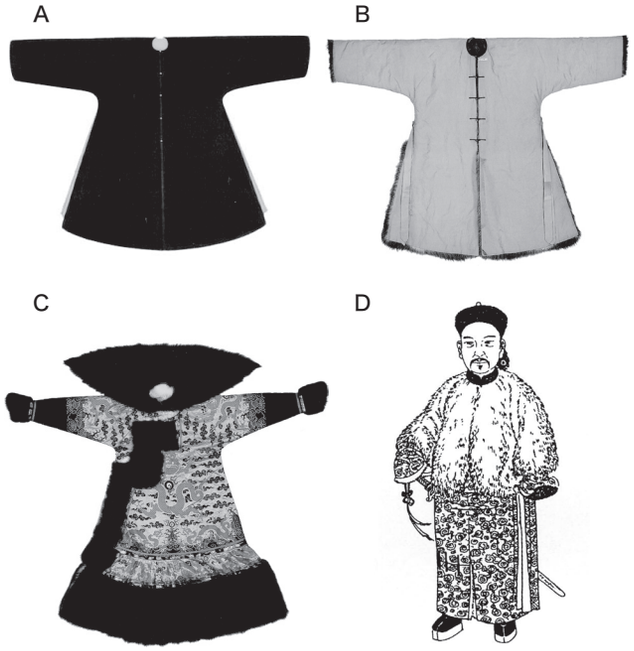

図５　清朝の皮衣と冬の朝服
A：皇帝のクロテンの端罩。故宮博物院のホームページ(http://www.dpm.org.cn/www_oldweb/)より転写編集
B：雍正帝の「明黄色狐皮端罩」。セゾン美術館（1997）より転写編集
C：康熙帝のクロテンを用いた「明黄色雲龍花緞皮朝袍」。故宮博物院（2008）より転写編集
D：運同銜侯選同知夏鑾の肖像画。「馬褂」と呼ばれる短いタイプの皮衣。（劉 2003）より転写編集

（アカギツネの黒色型のギンギツネのことか？）を皮衣に用いることができた。一方、毛皮を裏地にした端罩もある。**図５B**は雍正帝（在位一七二二～一七三五年）の端罩である。これはクロテンではなくて黒色のキツネの毛皮を裏地にしている。この他に冬期の皇帝の「朝服」（朝袍）には襟や袖先などにテン類や黒キツネの毛皮を取り付けた（**図５C**）。この遺品は康熙帝（在位一六六一～一七二二年）のもので、クロテン（紫貂）の他に「熏貂」（薫貂）を用いているが（故宮博物院 二〇〇八）、熏貂とはクロテンの毛皮の色彩バリエーションの一つか、テン類の毛皮を暗色に染色したものであろう。また、貂皮の利用は端罩のように服全体に使うよりも、帽子（冠）やアクセサリー、襟元、袖元に使う場合も多かった。この他に皮衣にはいくつかの種類がある。**図５D**は、「行袍（ぎょうほう）」と言う騎馬での外出着の上に着用する「行褂（ぎょうかい）」の一種である「翻毛皮馬褂」と呼ばれる短いタイプの皮衣である（周 二〇〇二）。以前の拙著（大舘 二〇一〇）でこの馬褂のことを短いタイプの端罩と誤った解説をしたのでここで訂正しておく。最上級の階級のみクロテンの毛皮を用いることができ、それよりも下の階級はヒョウや青・黄色のキツネ皮などの毛皮を官位に応じて用いた。いずれも清朝の服制に準じて筒袖タイプで、左右身頃はまん中でぴたりと綴じ、腰から下にはスリットが入っている。

清朝と同様に、近代に至るまでクロテンの皮衣の需要が高かったのは、朝鮮半島である。朝鮮半島の皮衣の利用の記録は『三国志』の扶余まで遡るが、当時は狐、狸などの毛皮が主だったようである（金 二〇〇八）。明朝が貂裘を宮廷で利用するのと時を同じくするように、李氏朝鮮でもクロテン（テン）の皮衣を珍重した（河内 一九九二）。クロテンの原皮は現代の北朝鮮や中国東北部南部など自国領内で調達するほかは、清朝と同じくツングース系狩猟民からの貢納、交易で担った。朝鮮でもクロテンは原則的に支配階層の着用であったが、庶民が用いることもあったようで、慢性的な需要超過となっていた（海保 二〇〇〇）。動物の毛皮で仕立てた上着はカドッ、裘衣（クウィ）・裘（ク）などとよばれ（金 二〇〇八）、貂の裘衣は貂裘（チョグ）、貂服、カッチョゴリと呼ばれる。この貂皮にはクロテンの他にも朝鮮半島に生息するキエリテンも含まれていたと思われる。元々、朝鮮の皮衣は膝まで長さの丈で毛が表になるように仕立てていたが、いつ頃からは不明であるが次第に裏打ちに使用するようになった。貂裘（チョグ）もはじめは袍（ポ）という長い外衣の全体の裏打ちに貂皮を用いていたが、時代が下がると短い服である上衣（チョゴリ）や背子（ペジャ）＝チョッキに裏打ちするようになり、カッチョゴリが一般的な貂裘の型式となった（**図６**）。カッチョゴリは毛皮を内側に向けるタイプであるが、左右の前身頃は正中線で綴じるのではなく交差させ、胸の紐で結んでいた。

最後に、近世アイヌにおける皮衣の利用について記述する。『蝦夷風俗図式』（谷文旦筆。一七九九年）には皮衣を纏ったアイヌの女性（**図７**）が描かれている。大塚（二〇〇一）によれば、これはクロテンの毛皮を用いたものとされている。一般に、アイヌはクロテン

（上）図６　李氏朝鮮のカッチョゴリ
金（2008）より転写編集
（下）図７　アイヌのクロテンの皮衣
『蝦夷風俗図式』に描かれた皮衣をまとったアイヌの女性。（大塚 2001）より転載

の毛皮はサンタン交易用に捕獲し、アイヌ自身の使用はほとんどなかったとされる（出利葉　二〇〇〇、出利葉二〇〇二）が、十七世紀後半に北海道の稚内周辺に漂着した朝鮮人の記録によると、この地方のアイヌはクロテンの皮衣を着用していたという（海保　二〇〇〇）。なお、江戸時代の和人によって描かれたアイヌの肖像画では、襟の合わせ方は未開人の風習という意味で政治的意図からわざと左衽（ひだりまえ）に描かれることが多いが（林　一九九六）、この絵では皮衣も下の着物も和人同様に右衽（みぎまえ）に絵が描かれているので、アイヌに対するあからさまな偏見や政治的意図があったようには思えない。このことからもこの絵は事実を反映している可能性が高い。この皮衣の毛皮にはテンの顔が付いておりアイヌ独特の原皮の裁断法をしている（あるいは断裁をほとんど施さない原皮に近い状態）。また左右身頃は紐によって腰で固定し、長さは脛から膝までの長さで、皮は外側にむけている。

以上、古代から近世における東アジアの皮衣の形態の特徴をまとめると、貫頭衣のように上からかぶるタイプではなく、前身頃が左右で分かれたタイプが普通のようである。左右身頃は交差させるか垂直に垂らすことが多いが、清の端罩のように正中線でぴったりと綴じるタイプも存在した。また、清の皇帝の端罩や朝鮮のカッチョゴリのように毛皮を内側に裏打ちするタイプもあるが、古代東アジアにおいては毛皮を外側に向けるのがより一般的である考えられた。

五、古代日本における皮衣

日本においてクロテンの皮衣がいつからいつまで用いられていたのであろうか？　これには明確に答えることは難しい。まず、いつ頃から使い始められたかということであるが、先述のように、『続日本紀』（七九七年成立）には、神亀四（七二九）年の第一次渤海使によって貂本〇〇張が朝廷に献じられたことが記載されている。この貂はクロテンで、貂裘に仕立てられた可能性が高いとされる（蓑島　二〇〇五）。これ以前にも、隋・唐や朝鮮半島、蝦夷（エミシ）からクロテンの原皮や皮衣がもたらされた可能性も否定できないが、この記載が貂皮に関する日本最初の公式記録となる。しかし、明かな「貂裘」の記録は『日本三代實録』（九〇一年成立）に記載の、仁和元（八八五）年正月十七日に参議未満の者に対する貂裘の着用を禁止した通達と思われる。このことから、貂裘が貴族階級に普及するのは九世紀後半になってかららしい（蓑島　二〇〇五）。つまり、八世紀初頭あたりから使い始めたらしいが、普及したのは九世紀後半ということである。これ以降、貂裘ないし黒貂裘は富貴階級の間でブームとなる。

皮

古代日本のクロテン皮衣の研究でしばしば論議されるのが『江家次第』に記述された重明親王（しげあきら）（九〇六～九五四）の一件である。この記載内容の真偽には論議があるが、ここでは事実としておく。その記述によれば、重明親王が黒貂裘を重ね着して渤海使を見学に行き、それを見た渤海使は自分が一領しか着用していないことに恥じ入ったという。重明親王が渤海使と会ったのは延喜二十（九二〇）年五月に最後の渤海使が入京した時と思われる（蓑島　二〇〇五）。旧暦五月の京都と言えば蒸し暑い最中である。そして、この行動は、従来、蒸し暑い中に無理をして毛皮コートを着重ねて、ファッション性や財力を誇ったと捉えられていた（西村　二〇〇三、上田　二〇〇四、河添　二〇〇八）が、蓑島（二〇〇五）は、この重ね着を、渤海国を通さなくても、日本国は別のルート（東北～北海道経由）により高価なクロテンを入手できることを示す政治的デモンストレーションであると捉えた。ただし、延喜二十年は、重明親王は十四才の元服前と推定される（古代学協会・古代学研究所　一九九四）ので、この行動は父帝の醍醐天皇や近臣による指示であったろう。冠もかぶっていない少年が、高価なクロテンの皮衣を重ね着している様は、相手を驚かせるには効果は十分であったろう。また、『扶桑略記』に延喜二十二年九月に渤海客を越前の国に安置した記載があるが、これは新たに来日した渤海使ではなくて、前回（つまり延喜十九～二十年）の渤海使の帰国時に逃亡した日本残留者の事ではないかと言われている（蓑島　二〇〇六）。可能性は低いが、仮に重明親王が渤海使に出合った年を延喜二十二年とすれば、彼は延喜二十一年に元服しているので成年の装束で渤海使に出合ったことになる。いずれにせよ、重明親王と渤海使の一件のあった十世紀はクロテンの皮衣は貴重な服飾品として人びとの垂涎の的となった絶頂期にあった。

次に、いつ頃まで着用されていたかという問題である。平安時代の王朝文学の筆頭格である十一世紀初頭に成立した『源氏物語』の末摘花（すえつむはな）の巻ではキーアイテムとして黒貂裘が登場する。末摘花の女主人公の父である常陸宮のモデルは前述した重明親王と言われている（河添　二〇〇八）。重明親王には源邦正という息子がいるが、その容貌は末摘花の女主人公と類似し、背が高く色白で鼻が高いという顔立ちをしており、それが嘲笑の対象となっている（『今昔物語』、『宇治拾遺物語』）。執筆当時の『源氏物語』の読者には末摘花の容貌描写から、実在の源邦正とその父親の重明親王が容易に連想されたに違いない。

さて、『源氏物語』末摘花の記述は、多くの論考では（例えば、蓑島　二〇〇五、河添　二〇〇八）、『源氏物語』成立時に

は黒貂裘は古くさい、あるいは流行遅れのものであると解釈されている。では、『源氏物語』のこの場面を再検討してみよう。原文を引用すると、

聴色のわりなう上白みたる一かさね、なごりなう黒き袿かさねて、表着には黒貂の皮衣、いときよらにかうばしきを着たまへり。古代のゆゑづきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには似げなうおどろおどろしきこと、いともてはやされたり。されど、げに、この皮なうて、はた、寒からましと見ゆる御顔ざまなるを心苦しと見たまふ。　（『新編日本古典文学全集』小学館より）

この中の「古代」という単語から、「古くさい」というマイナスの解釈がなされてきたと思われる。『古語大辞典』（中田ほか　一九八三）によれば、古代は古体を当てる方がより適切であり、末摘花での用法は「古めかしいこと、古風」をあらわすとされている。しかし、注目すべきキーワードはその次の、「ゆゑづきたる」（故づきたる）と「おどろおどろしきこと」であろう。つまり、前述したように、執筆された当時の『源氏物語』の読者には、史実の重明親王と渤海使のやりとりに使われた黒貂裘の逸話が、まだ広く語り継がれ了解事項として認識されており、「ゆゑづきたる」には「そのような由緒をもった件の黒貂裘」という意味を含有しているのではなかろうか（八條忠基氏指摘）。だから、そのような外交という政治の場で用いられた黒貂裘をうら若い女性が着用しているのは仰々しく似つかわしくないと言っているのである。ましてや平安時代の日本では黒貂裘は主に男性の着用するものとされていた（河添　二〇〇八）ので、なおさら末摘花のファッション・センスのなさを強調したのだろう。以上の様に、原文を再検討しても、黒貂の皮衣自体が時代遅れのファッションだとは明記されてはいない。そうしたことを踏まえると、引用文の意は、

ゆるし色である薄紅色がすっかり色あせ白っぽくなってしまった襲衣の上に、元の色がわからぬほど黒ずんでしまった袿を重ねて、さらにその上に香を焚きしめた黒貂の皮衣を着ていらっしゃる。古い時代の由緒ある装束ですが、うら若い女性の着物としては似つかわしくなく仰々しいもので、場違いさが目を引きます。しかし「この皮衣がないと寒いですもの」といわんばかりの末摘花のお顔を、光源氏は気の毒に御覧になっていらっしゃる。

となろう。つまり古代（古体）は、「父の代からの古いもの」という、単なる時間的古さの意味であって、「古くさい」や「ファッション遅れ」を強調したものではないのではないだろうか？

また末摘花の父親のモデルとされる重明親王の時代には、前述のようにクロテンの皮衣は政治的アピールも備えた富貴のシンボルであった。それは奈良時代以来二百年以上続いていたファッションであり、その娘の世代で一気に古くさくなるのは不自然であろう（もっとも、実在の源邦正の活躍時期と紫式部の源氏物語執筆時期は数十年の時差がある）。さらには藤原道長の日記である『御堂関白記』には道長が長和四（一〇一五）年に宋の僧に貂裘を三領、別の宋僧に貂裘一領を送ったとの記述がある。この事実は十一世紀初頭の貴族社会において、貂裘はまだ重宝との認識があったことを示すものである。このことから、道長の時代に成立したとされる『源氏物語』の読者の間で黒貂裘が「古くさい」という認識があったとは思えない。

さて、クロテンの皮衣がいつ頃まで使われていたかについてであるが、現時点では私は、黒貂裘が利用されなくなったのは、クロテンを表すフルキという単語が実用上使われなくなった鎌倉時代中期（海保　二〇〇〇）より少し前の十二世紀～十三世紀初頭ごろではないかと考えている。あるものが利用されなくなれば、それを表す単語は消滅するか、他のより一般的な単語（この場合、クロテン、コクチョウなど）に置き換わるとすると考えるのが自然であろう。

以上の事から、日本においてはクロテンの皮衣は八世紀初頭から十三世紀初頭ごろまで四～五百年の長きに渡り使われていたと推定される。このような長期に渡り黒貂の皮衣が利用され、重宝あつかいされていたのにも関わらず、黒貂裘の絵画資料や遺物が見られないのは意外なことである。いずれにせよ鎌倉時代中期以後は、明治以降にロシアン・セーブルのコートが輸入されるまでの長期間の間に、日本（アイヌ以外）においてクロテンの皮衣が利用された形跡は管見の限り皆無である（ラッコやカワウソの毛皮は江戸時代に貴重なものとして利用されていたこともある）。クロテンの皮衣に限らず、中世・近世日本では服飾としての毛皮製品の利用や獣肉食があまり行われなくなったのは、仏教の殺生戒や神道的穢れの思想の普及と関与していると思われる（鵜澤　二〇〇八）。

最後に日本古代のクロテンの皮衣の形状についての推定を試みる。最初に結論を言うと形状の実情についての詳細はわからない。遺物や絵画資料の報告例がないので、大舘（二〇一〇）は、三節で述べた東アジア各地の古代から近世までの皮衣との比較と、文献記述から形状の推定を試みた。

古代から近世の東アジア各地のクロテンなどの皮衣の形状の共通点は、貫頭衣型式ではなくて、左右身頃が分割していることである。左右身頃は交差させるか、下に垂直に垂らす

かのどちらかである。ただし、清の端罩や馬褂などでは左右身頃は正中線で綴じる型式である。また、端罩や李氏朝鮮のカッチョゴリでは毛皮を裏打ちにしたものがあるが、毛皮を外側に向けるものがより古いタイプであったと思われる。

日本における黒貂裘（クロテンの皮衣）の形状推定に寄与する文献として『江家次第』（春日祭）、『多武峰少将物語』、『うつほ物語』（蔵開中）、『源氏物語』（末摘花）、『御堂関白記』のクロテンの皮衣の記載を検討した。（詳細については大舘　二〇一〇を参照）いずれの文献も平安時代中期から後期のものである。これらの記述から、重ね着ができる、下の装束の状態が見える、長短二タイプがある、裏に布地をつけている、ことなどが分かった。

文献や諸地域の皮衣の形状を比較して総合的に古代日本の黒貂裘の形状を推定した要約を示す。

（1）長さには、少なくとも長短の二タイプあった。長尺タイプは六〜七尺程度の裾を引きずるようなものであった。これは夜具としても利用された。短尺タイプの詳細な長さはわかないが、腰丈（腰から少し下までの長さ）程度の長さではないかと思われる。

（2）前身頃は、左右分割タイプと思われる。左右前身頃は交差させるか、現代の羽織のように垂直に垂らすようなタイプと考えられる。また紐などで腰や胸で固定することもあったであろう。

（3）袖丈は下に着用する装束よりも長かったであろう。一方、皮衣の袖裄の長さは手首までの長さよりも短かったであろう。また半袖や袖無しタイプもあった可能性もある。

（4）裏は綾などの絹布を張っていた。つまり、明らかに毛皮を外に向けるタイプである。また防寒機能を高めるために綿などの詰め物をすることもあった。

© 綾麿

© 小泉吉宏・幻冬舎

（上）図8　10世紀の上級貴族が黒貂裘を重ね着した想像図
束帯の上に長尺長袖タイプの黒貂裘を着用し、さらにその上に何領かの短尺袖無しタイプを重ね着した場面を想定した

（下）図9　源氏物語末摘花巻の女主人公が着用した黒貂裘の想像図
これは袖無しタイプとして描かれている

以上の情報により、十世紀の上級貴族が束帯を着用して、その上に黒貂裘を重ね着した想像図を**図8**に示す（綾麿氏、原図）。このモデルとなったのは渤海使と会った時の重明親王であるが、当時の親王は元服前であったと思われるので実際には冠はつけずに髪型はミズラで闕腋袍を着用していただろう。ここでは、長いタイプの上に袖無しの短いタイプの皮衣を何領か着用していることを想定している。また、『源氏物語』の末摘花の女主人公が黒貂裘を着用した例として、小泉吉宏氏の想像図（小泉　二〇〇二）を示す（**図9**）。この図では袖無しの短いタイプとして描かれているが、ファッション・センスのなさを強調するには下の装束がより見えにくい、袖があり長いタイプの皮衣のほうが効果的だったかもしれない。いずれの図も想像の域を出ないが、装束と毛皮のコートの組み合わせというのは現代人の感覚からすると意外に思えるかも知れない。しかし、実際、渤海国や奥州経由でもたらされたクロテンの皮衣は、上級貴族のステータス・シンボルとして長期間愛用されていたのである。我々の通念を転換させて当時の情景を視覚的に考慮してみると、新たな発想もできるかも知れない。また今後、日本古代の黒貂裘の形状推定に関する直接的な資料の発見により、真実により近い形状推定が可能になることを期待したい。例えば、第一回渤海使によって大量に貂皮をもたらされた時の天皇は聖武天皇であるが、彼の遺品のなかに黒貂裘の伝世品や残欠はないだろうか？　また、神社仏閣などの木像などに黒貂裘を表現したものは残っていないだろうか？　もし発見されればクロテンの交易史の研究に大きな一石を投じよう。

謝辞

有職装束研究会「綺陽会」（八條忠基主宰）の会員各氏には、様々な指摘と協力を受けた。特に、藤尾隆（ペンネーム・綾麿）氏には黒貂裘のイラストも描いていただいた。福永重治氏には毛皮製品についての基本的な事項についてご教示いただいた。八條忠基、大野裕子、蓑島栄紀の各氏には初期原稿へのご意見をしていただいた。富士元寿彦、岩井基の両氏にはクロテンの写真の提供をいただいた。A. V. Abramov氏にはロシア動物学研究所所蔵のクロテンの毛皮の写真の撮影と提供を願った。北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園にはニホンテンおよびクロテンの写真撮影の許可を頂いた。小泉吉宏氏および幻冬舎には末摘花のイラストの転載の許可を頂いた。以上の方々に感謝の意を表します。

引用文献

阿部秋生ほか校注（一九九四〜九八）「新編日本古典文学全集20-25. 源氏物語」小学館

上田雄（二〇〇四）『渤海国　東アジア古代王国の使者たち』講談社

鵜澤和宏（二〇〇八）「肉食の変遷」『人と動物の日本史　1　動

物の考古学』西本豊弘編集、吉川弘文館、一四七―一七五頁。
大館大學（二〇一〇）「日本古代のクロテンの皮衣（黒貂裘）の形状について」『Biostory』一四、七〇―八一頁
大塚和義（二〇〇一）「毛皮交易者としてのアイヌ」『ラッコとガラス玉　北太平洋の先住民交易』（大塚和雄編集）国立民族学博物館、三六―三七頁
海保嶺夫（二〇〇〇）「アイヌ民族の交易形態と貂の役割―一六九六年、蝦夷地に漂着した朝鮮人の史料より」『北の文化交流史研究事業研究報告』（北海道開拓記念館編集）北海道開拓記念館、二五五―二六八頁
河添房江（二〇〇八）「光源氏が愛した王朝ブランド品」角川書店
河内良弘（一九九二）「明代女眞史の研究」同朋舎出版
菊池俊彦（二〇〇四）『環オホーツク海古代文化の研究』北海道大学大学院文学研究科研究叢書6、北海道大学図書刊行会
金英淑編著（中村克哉訳）（二〇〇八）『韓国服飾文化事典』東方出版
小泉吉宏（二〇〇二）『大捜源氏物語　まろ、ん？』幻冬舎
故宮博物院（二〇〇八）『天朝衣冠　故宮博物院蔵　清代宮廷服飾精品展』北京・紫禁城出版社
古代学協会・古代学研究所編（角田文衞監修）（一九九四）『平安時代史事典』角川書店
佐々木史郎（一九九六）『北方から来た交易民――絹と毛皮とサンタン人』日本放送出版協会
佐々木史郎（二〇〇六）「サンタンとスメレンクル――十九世紀の北方交易民の実像」『北方世界の交流と変容――中世の北東アジアと日本列島』（天野哲也、臼杵勲、菊池俊彦編集）山川出版、一二―五五頁
下山晃（二〇〇五）『毛皮と皮革の文明史――世界フロンティアと略奪のシステム』ミネルヴァ書房
周錫保（二〇〇二）『中国古代服飾史』北京、中国戯劇出版社
鈴木仁（二〇〇八）「日本の哺乳類にみる毛色の進化」『生物の科学　遺伝』六二、六〇―六六頁
セゾン美術館（一九九七）『紫禁城の后妃と宮廷芸術　図録』セゾン美術館
出利葉浩司（二〇〇〇）「アイヌ社会における毛皮の利用について――『蝦夷島奇観』の検討をとおして」『北の文化交流史研究事業研究報告』（北海道開拓記念館編集）北海道開拓記念館、二三五―二五四頁
出利葉浩司（二〇〇二）「近世末期におけるアイヌの毛皮獣狩猟活動について」『開かれた系としての狩猟採集社会』（佐々木史郎編集）国立民族学博物館、九七―一六三頁。
土肥恒之（二〇〇七）『興亡の世界史　第一四巻　ロシア・ロマノフ王朝の大地』講談社
中田祝夫、和田 利政、北原 保雄編（一九八三）『古語大辞典』小学館
西村三郎（二〇〇三）『毛皮と人間の歴史』紀伊國屋書店
林昇太郎（一九九六）「アイヌ絵にみる蝦夷錦を着たアイヌ」『第四二回特別展　山丹交易と蝦夷錦』（北海道開拓記念館編集）北海道開拓記念館、五四―五七頁
フォーシス・ジェームス（森本和男訳）（一九九八）「シベリア先住民の歴史　ロシアの北方アジア植民地一五八一―一九九〇」溪流社
三浦精美（二〇〇三）『ロシアの源流――中心なき森と草原から第三のローマへ』講談社
蓑島栄紀（二〇〇五）「平安期貴族社会とサハリンのクロテン」

『北方島文化研究』3、三五―四八頁
蓑島栄紀（二〇〇六）「史料からみた靺鞨・渤海・女真と日本列島」『北方世界の交流と変容――中世の北東アジアと日本列島』（天野哲也、臼杵勲、菊池俊彦編集）山川出版、七六―九九頁。
劉永華（二〇〇三）『中国古代軍戎服飾』上海・上海古籍出版社
Heptner,V. G., et al.（2002）*Mammals of the Soviet Union, Vol.2. Carnivora* (Weasels; Additonal Species) (Russian original paper was published in 1967). Enfield, NH, USA, Scientific Publishers
Koepfli, K., et al.（2008）"Multigene phylogeny of the Mustelidae: Resolving relationships, tempo and biogeographic history of a mammalian adaptive radiation", *BMC Biology* 6: doi:10.1186/1741-7007-6-10. PMID 18275614. PMC 2276185
Ohdachi, S. D., et al. Edition（2010）*The Wild Mammals of Japan*, 2nd printing Kyoto, Shoukadoh

アジア遊学136号
環境と歴史学
歴史研究の新地平
歴史研究において〈環境〉を扱うとき、どのようなアプローチが可能であるか。
日本から、アジア、アフリカ、ヨーロッパ地域にまで視点を広げ、歴史学、考古学、地理学、環境史、民俗学など異分野の研究者が最新の研究成果を問う。
第一部　環境と歴史学へのアプローチ
第二部　環境と地域史
水島　司
佐藤洋一郎
鶴間和幸
梅﨑昌裕
卯田宗平
宮瀧交二
飯沼賢司
菅　豊
徳橋　曜
森田直子
上田　信
クリスチャン・ダニエルス
加藤　博
長谷川奏
石川博樹
澤井一彰
海老澤衷
高橋　学
北條勝貴
田中耕司
応地利明
水井万里子
水島　司【編】
本体2,400円+税
A5判・並製・240頁
ISBN978-4-585-22602-4
勉誠出版
〒一〇一―〇〇五一 千代田区神田神保町二―二〇―六表示価税抜
TEL・03-5215-9021 FAX・03-5215-9025 HP=www.bensey.co.jp